

スキー・雪遊び教室が知的障害児の強さと困難さ 並びに支援学生の意識・態度に及ぼす影響

島 孟留・小山 啓太・木 山 慶子
田 井 健太郎・本 並 健太・霜 触 智紀
中 雄 勇人・霜 田 浩信・岡 田 明子
茂 木 勇 樹

The Effects of Skiing and Playing with Snow Experiences on Mentally Retarded Children and the University Students Who Support Them

Takeru SHIMA, Keita KOYAMA, Keiko KIYAMA,
Kentaro TAI, Kenta MOTONAMI, Tomonori SHIMOFURE,
Hayato NAKAO, Hironobu SHIMODA, Akiko OKADA
and Yuki MOTEGI

スキー・雪遊び教室が知的障害児の強さと困難さ 並びに支援学生の意識・態度に及ぼす影響

島 孟 留¹⁾・小 山 啓 太¹⁾・木 山 慶 子¹⁾
田 井 健太郎¹⁾・本 並 健 太¹⁾・霜 触 智 紀²⁾
中 雄 勇 人¹⁾・霜 田 浩 信³⁾・岡 田 明 子⁴⁾
茂 木 勇 樹⁴⁾

- 1) 群馬大学共同教育学部保健体育講座
 - 2) 宇都宮共和大学子ども生活学部
 - 3) 群馬大学共同教育学部特別支援教育講座
 - 4) 群馬大学共同教育学部附属特別支援学校
- (2023年9月27日受理)

The Effects of Skiing and Playing with Snow Experiences on Mentally Retarded Children and the University Students Who Support Them

Takeru SHIMA¹⁾, Keita KOYAMA¹⁾, Keiko KIYAMA¹⁾,
Kentarō TAI¹⁾, Kenta MOTONAMI¹⁾, Tomonori SHIMOFURE²⁾,
Hayato NAKAO¹⁾, Hironobu SHIMODA³⁾, Akiko OKADA⁴⁾
and Yuki MOTEGI⁴⁾

- 1) Department of Health and Physical Education, Cooperative Faculty of Education, Gunma University
 - 2) Faculty of Child Studies, Utsunomiya Kyowa University
 - 3) Department of Special Needs Education, Cooperative Faculty of Education, Gunma University
 - 4) School for Children with Special Education Needs, Cooperative Faculty of Education, Gunma University
- (Accepted on September 27th, 2023)

I. 緒 言

運動・スポーツは、子どもから高齢者まであらゆる年代の人々の心身の機能を高める上で有効である。コロナ禍に見舞われて以来、運動・スポーツの重要性が再認識されており、その機会の確保の需要は高いといえる。運動・スポーツの効果は、知的障害の

ある子どもたち（以下、「知的障害児」と略す）にも同様に与えられ、実際に、知的障害児（者）の生活の質（QOL）の向上やライフスキルの獲得に寄与する可能性が示されている^{1,2)}。知的障害児の運動・スポーツの機会としては、体育授業はもちろんのこと、これに加えてスペシャルオリンピックスがある。このような事業に倣って地域における障害者

スポーツを推進することで、知的障害児が運動・スポーツの楽しさを味わい、その有益な効果を楽しむことができる機会が増し、知的障害児の生涯を豊かにできると想定される。

障害者スポーツの機会の充実に向けたプロジェクトとして、我々は2021年度に「令和3年度群馬大学地域貢献事業障害のある子どもたちのスポーツ体験プロジェクト」を実施した³⁾。知的障害者に対する冬季のスポーツ・身体活動効果については、これまでほとんど研究されておらず⁴⁾、上記の2021年度のスポーツ体験プロジェクトは、先駆的な試みであった。この2021年度のプロジェクトでは、参加児童・生徒の保護者への聞き取りから、児童・生徒が参加すること自体へ意義を感じていることが、みてとれた。これは当プロジェクトが、先行研究で想定されている保護者のスポーツニーズ⁵⁾に込えられるものとなっている可能性を示している。しかしながら、スキー・雪遊び教室が参加児童・生徒に及ぼす効果については不明なままである。

障害者のスポーツプログラムの有効性は、これに携わる支援者にも波及しうる。例えば、障害者スポーツ大会へのボランティアとしての参加の事例ではあるが、障害者スポーツやそのアスリートへの理解が深まる可能性が報告されている⁶⁾。また、我々の2021年度のプロジェクトでも、スキー・雪遊び教室実施前に比べて教室後に支援者の「否定的印象」が低下することを見出している³⁾。しかし、これらのような障害者スポーツプログラムの支援者に対する有効性に関わる検討は、端緒についたばかりであるため、更なる検討が必要である。

そこで本研究では、知的障害児を対象としたスキー・雪遊び教室が、参加児童・生徒の強さと困難

さならびに支援者の知的障害者に対する意識・態度に及ぼす影響について、質問紙調査やアンケートを用いて検討することとした。

II. 方法

1. 対象と手続き

本研究は、「令和4年度群馬大学地域貢献事業障害のある子どもたちのスポーツ体験プロジェクト」内で実施した。この体験プロジェクトは、前年度に続く第2回目のプロジェクトであった。表1に本プロジェクト全体の流れを示した。本プロジェクトのスキー・雪遊び教室へは、群馬県内の特別支援学級や特別支援学校（知的障害）に在籍する児童・生徒7名（小学校5年～高等学校1年の男子6名、女子1名）が参加した。いずれの児童・生徒も、前年度の「令和3年度群馬大学地域貢献事業障害のある子どもたちのスポーツ体験プロジェクト」に参加しており、2年連続の参加であった。支援者として、群馬大学教職員7名、群馬大学共同教育学部附属特別支援学校教員2名、宇都宮共和大学教員1名、群馬大学共同教育学部に所属する学生13名（教職大学院生2名、保健体育専攻生8名、特別支援教育専攻3名）が本プロジェクトの実行にあたった。支援者の学生（以下、「支援学生」と略す）と参加児童・生徒の保護者（以下、「保護者」と略す）に対して、インターネットツールによるアンケート調査をスキー・雪遊び教室の前後の計2回実施した。倫理的配慮として、回答は任意であること、データの公表において個人を特定しないこと、回答の有無による利益・不利益が生じないことを書面及び口頭で説明し、回答をもってその同意とした。

表1 2022年度のプロジェク​​トの流れ

日程	内容	場所	調査計画
2022年12月6日	スタッフ・支援者の打ち合わせ	群馬大学 荒牧キャンパス	支援者 事前調査
12月24日	参加者向け事前説明会	Zoom	保護者 事前調査
2023年1月13日	スタッフ・支援者 事前練習会		—
1月21日	スキー・雪遊び教室①	軽井沢スノーパーク	—
2月12日	スキー・雪遊び教室②		支援者・保護者 事後調査

表2 スキー・雪遊び教室の流れ

日程	内容	場所
2023年1月21日,	10:30-11:00	支援者集合
2月12日	-12:00	参加者集合
	12:20-14:00	スキー・雪遊び活動
	14:00-14:30	休憩・軽食
	14:30-15:30	スキー・雪遊び活動
	15:30-16:00	振り返り, 解散

※本タイムスケジュールは、活動の目安であり、実態は多少異っていた。

2. 支援学生に対する調査

2.1 知的障害者に対する日常場面での意識・態度

本プロジェクトの支援学生に対する調査として、松本・田引⁷⁾の研究で用いられた「知的障がい者に対する日常場面での意識・態度」を測定する18項目を、一部質問語句を変更して用いた。これら18項目はそれぞれ、実践態度、社会的受容、否定的印象の3因子に分かれており、具体的な関わり態度を表す「実践態度」に関する8項目、知的障害者の社会的な位置付けに関する「社会的受容」の6項目、明らかに否定的な印象を持った「否定的印象」に関する4項目の全18項目で構成される。回答は、松本・田引⁷⁾に基づき、「まったくあてはまらない(1点)」～「非常にあてはまる(5点)」の五段階尺度を用いてそれぞれに得点を与えて、各因子に対応した項目得点を平均し、下位尺度得点、25%タイル値、中央値、75%タイル値を算出した。

2.2 自由記述

事前調査では「今回のプロジェクトでは、どんな経験を積みたいですか」という問いを設定し、自由記述を求めた。また、事後調査では、大山⁸⁾の先行研究で使用された「振り返りシート」の6項目(「プログラム前の様子(体調・気分、ブーツ・ウェアなどを自分で準備していたかなど)」「体操の様子(伸ばすところをしっかりと伸ばせているか、どのようなサポートが必要かなど)」「プログラム中(プログラム中に気づいたことをお書きください)」「休憩中(休憩中に気づいたことをお書きください)」「プログラム中②(プログラム中に気づいたことをお書き

ください)」「その他、気づいたこと(自由にお書きください)」)を参考に、自由記述を求めた。

3. 保護者に対する調査

本プロジェクトに参加した児童・生徒の保護者に、事前調査では本プロジェクトに期待することについて、事後調査では本プロジェクト内やその後における自身の子どもの様子について、自由記述の回答を求めた。また、本研究では、霜触ら³⁾では未検討であった参加した児童・生徒の変容についての調査を加え、本プロジェクトの前後に、子どもの強さと困難さアンケート(Strength and Difficulties Questionnaire: SDQ)⁹⁾への回答を求めた。

4. 解析方法

支援学生を対象として調査した「知的障がい者に対する日常場面での意識・態度」並びに保護者を対象として調査したSDQの得点の解析については、正規性の検定を実施した後、実施前後の得点をWilcoxonの符号付き順位検定にて比較した。統計処理ソフトは、IBM SPSS Statistics Ver.27を用い、有意水準は5%未満とした。

支援学生並びに保護者を対象として調査した自由記述については、テキストマイニングを実施し、単語の出現傾向を探った。

Ⅲ. 結果

1. 支援学生に対する調査

1.1 知的障害者に対する日常場面での意識・態度の認知の変容について

表3に、支援学生のスキー・雪遊び教室実施前後の知的障害者に対する意識・態度得点の比較結果を示す。分析した結果、3因子の尺度得点に有意な差は認められなかった。

1.2 自由記述の分析

支援学生の自由記述についてテキストマイニングにより分析した結果を図1に示す。事前調査では、「知的障害」「学校現場」「学ぶ」「生かせる」等の単語が主に抽出された。事後調査では、「滑る」「ウェ

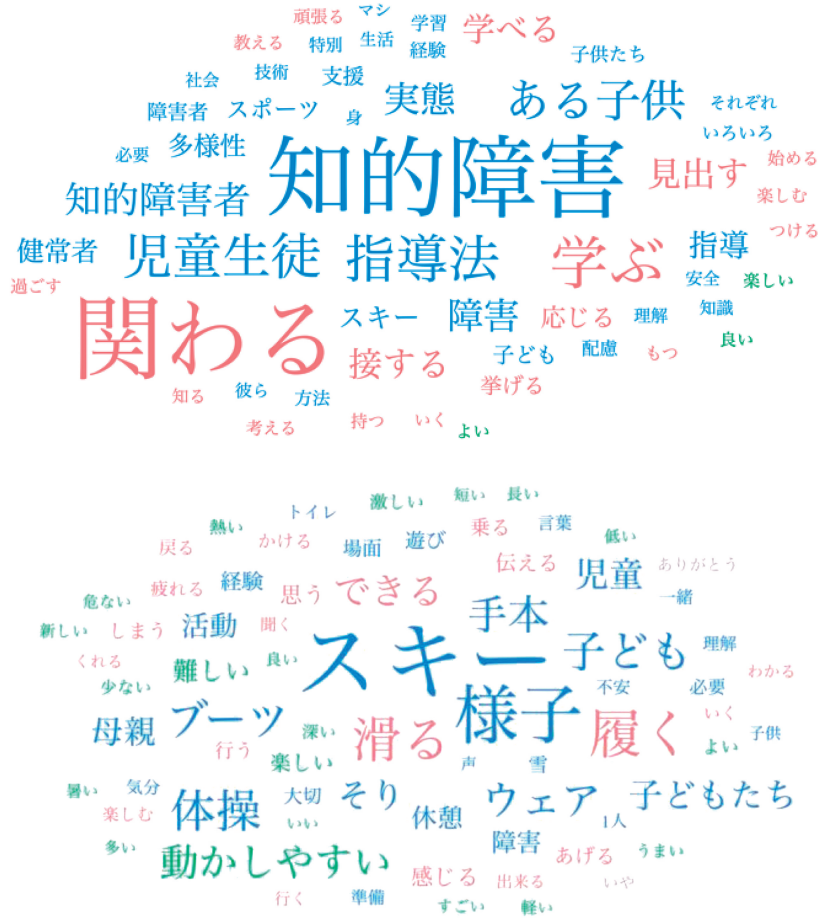


図1 支援者の自由記述分析（上が事前，下が事後調査）

表3 支援学生の知的障害者に対する日常場面での意識・態度の認知の変容

		平均値	中央値	25%タイル	75%タイル	p
実践態度	教室前	4.39	4.28	4.12	4.62	ns
	実施後	4.33	4.25	4.14	4.70	
社会的変容	実施前	4.16	4.00	3.80	4.50	ns
	実施後	4.20	4.16	3.80	4.60	
否定的印象	教室前	2.48	2.00	1.70	3.50	ns
	教室後	2.50	2.25	1.50	3.50	

ア)「児童生徒」「スキー板」「ブーツ」「取り組む」等の単語が抽出された。

2. 保護者に対する調査

保護者の自由記述についてテキストマイニングに

より分析した結果を図2に示す。事前調査では、「コロナ感染」「zoom」「あらわれる」「唱える」「進む」等の単語が主に抽出された。事後調査では、「見透す」「面食らう」「滑る」「スキー」等の単語が主に抽出された。

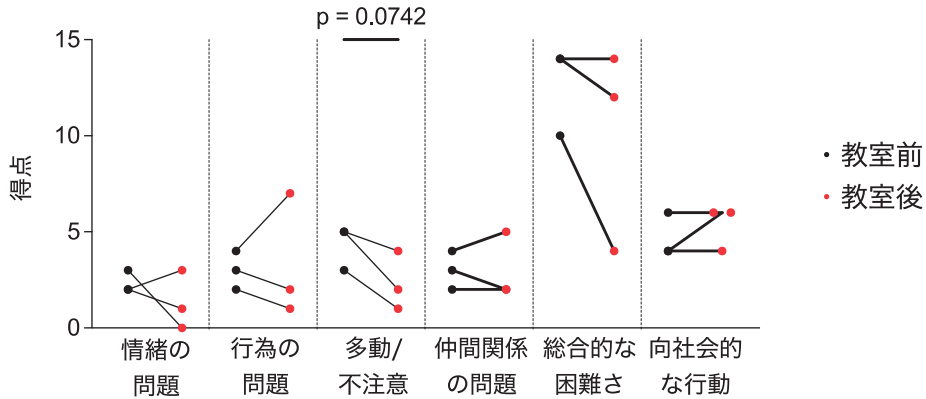


図3 スキー・雪遊び教室実施前後のSDQの結果

生活環境，障害者に対する知識などの影響と指摘されている¹⁰⁾。本研究における支援学生の多くは、「ボランティア活動に参加」、「施設や学校を訪問したい」、「助けてあげたい」、「一緒にスポーツ」、「一緒に遊び学ぶ」といった実践態度因子で高得点を示しており、これは同様の障害者イベントに参加したスタッフの数値より有意に高かった⁷⁾。すなわち、支援学生の多くが身近で話しやすく親しみやすい「親和性」や、やさしくおだやかで明るい「性格」をもっている可能性が示唆され、支えるスポーツとしての障害者スポーツへ参加する教育学部生の特性といえるかもしれない。

1.2 由記述の分析

支援学生の自由記述についてテキストマイニングにより分析した結果、事前調査では、「知的障害」「学校現場」「学ぶ」「生かせる」等の単語が主に抽出された。この結果から、支援学生は本プロジェクトを通して、知的障害児への支援の方法やスキーや雪遊びの指導方法について理解を深めたいと考える傾向にあることが推察された。この傾向は、本プロジェクトへ参加したいいずれの学生も教育学部に所属しており、将来の自分自身のキャリアのために学びたいという意思の表れであるとも考えられる。一方で、事後調査においては、「滑る」「ウェア」「児童生徒」「スキー板」「ブーツ」「取り組む」等の単語が主に抽出され、より具体的な行動に関する記述の傾向が

みられた。この結果から、教室後の支援学生は、事前調査にて課題にした指導方法について、具体的な場面を経験しつつ、反省することができたものと推察される。また、先行研究では、「振り返りシートを作成すること自体が、自身の指導方法や選手の状態について明確化するためのトレーニングとなっている可能性⁸⁾」と述べられている。したがって、こうした振り返りの機会を設けることにより、支援者の支援方法や、支援する知的障害児の心身の状態の把握等の細かな反省や深い考察を促し、参加児童・生徒に対してより効果的な支援ができるようになるものと考えられる。

2. 保護者に対する調査からみたプロジェクトの意義と課題

保護者の自由記述についてテキストマイニングにより分析した結果、事前調査では、「コロナ感染」「zoom」「あらわれる」「唱える」「すすむ」等の単語が主に抽出された。「コロナ感染」「zoom」については、本年の説明会がオンライン開催であったことに対するポジティブな意見だと考えられる。「あらわれる（心が洗われる）」「唱える（去年を思い出して嬉しそうに唱える）」等の単語が主に抽出された結果から、保護者の本教室に対して安心する様子や、参加児童・生徒がスキー・雪遊びを楽しみにする様子を伺えた。本教室は昨年度に続き、2回目の開催であり、本年度の参加児童・生徒はいずれも昨

年度からの継続参加者であった。そのため、参加児童・生徒に、本スキー・雪遊び教室での活動の見通しを与えられ、本教室への児童・生徒のスポーツ参加への意欲を促すとともに、先行研究で想定されている保護者のスポーツニーズ⁵⁾に応えられるものとなっている可能性が見て取れた。一方で、テキストマイニングから抽出された「すすむ(体を動かすことをすすんでやらない)」の結果から、参加児童・生徒の日常的な様子について保護者が不安に感じている様子を伺えた。

事後調査では、「見透す(子どもが見透しをもって取り組めた)」「面食らう」「滑る」「スキー」等の単語が主に抽出された。この結果から、事後調査は事前調査に比較し、参加した子どもが本教室を楽しむ様子や、スキー体験を通じた子どもの変化に保護者が驚かされている様子を伺えた。体育・スポーツ活動への参加は、子どもらのライフスキルの獲得を促し¹⁾、これは知的障害者においても同様である²⁾。本調査では、スキー・雪遊び教室実施前に比べて教室実施後の子どもの多動/不注意の得点が低い傾向がみられた(図3)。これは、保護者の所感の傍証であるとともに、本教室がライフスキルの醸成に功を奏する可能性を示唆する結果だといえる。しかしながら、事前調査で収集されていた参加児童・生徒の日常的な様子に対する保護者の不安(体を動かすことをすすんでやらない)を解消できたかどうかは不明であることから、今後のプロジェクトで、より効果的な支援や具体的な指導方法を考案することが求められる。

また、保護者への事後調査から「2回目」という単語が抽出されているように、継続的な実施に関する意見が得られた。保護者からは、継続的な本教室の開催に肯定的な意見を得られていることから、本研究で調査した点以外にも、児童・生徒らへ良い影響を与えられているのかもしれない。これについても、今後詳細に検討すべきといえる。

V. 本研究の限界と今後の課題

本研究はいくつかの限界を有する。まず、本研究

で収集した子どもの強さと困難さに関するデータは、実際の参加児童・生徒から得た回答では無いことである。ただ実際に参加児童・生徒から回答を得るのは難しいため、本研究で実施した保護者からの聞き取りに加えて、今後は参加児童・生徒らの担任教員への聞き取りなどを加えることにより、本プロジェクトの有効性を見出す必要がある。次に、本研究でみられたSDQの変化の結果が、本プロジェクトへの継続参加により得られる効果なのかどうかについて、検証が必要である。新規参加者を募り、本プロジェクトに参加していただくことで、この検証が進むとともに、本プロジェクトの発展にもつながると考えられる。

VI. 結論

- ①本プロジェクトのスキー・雪遊び教室は、支援学生が具体的な場面の経験を通じて、自身の指導方法を省みることができると推察される。
- ②保護者は、本教室を経験することで子どもらのライフスキル、とりわけ多動/不注意行動が改善する可能性を感じていることが示唆された。

参考文献

- 1) 金子勝司, 南條正人: 知的障害児(者)のスポーツ・レクリエーション活動と生活の質(QOL)に関する研究—性別による活動群と非活動群からの比較検討—, 岐阜協立大学論集, 23: 111-125, 2007.
- 2) D. Özer, F. Baran, A. Aktop, *et al.*: Effects of a Special Olympics Unified Sports soccer program on psycho-social attributes of youth with and without intellectual disability. *Research in Developmental Disabilities*, 33(1): 229-239, 2012.
- 3) 霜触智紀, 木山慶子, 中雄勇人, 他: スキー・雪遊び体験を通じた知的障害児の支援に関する研究, 群馬大学共同教育学部紀要 芸術・技術・体育・生活科学編, 58: 27-36, 2023.
- 4) 安井友康: 障害者の冬季身体活動に関する研究—障害者

歩くスキー大会参加者の調査から一，年報いわみざわ：初等教育・教師教育研究，19：57-65，1998.

5) 田引俊和：知的障害者のスポーツニーズと課題の検討ースペシャルオリンピックス参加者の保護者を対象とした調査分析ー，北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要，(10)：73-78，2017.

6) 近藤尚也：ボランティア活動を通じた障害者のスポーツ参加に対する理解ー障害者スポーツ大会ボランティアを経験した大学生への聞き取りからー，北海道医療大学看護福祉学部紀要，25：27-31，2018.

7) 松本耕二，田引俊和：障がい者スポーツをささえるボランティアからみた知的障がい者のイメージと日常生活における意識・態度，山口県立大学学術情報，(2)：27-38，

2009.

8) 大山祐太：知的障害者のスポーツ活動における指導記録の記述に関する検討，アダプテッド・スポーツ科学，13(1)：11-22，2015.

9) R Goodman: The Strengths and Difficulties Questionnaire: a research note. The Journal of Child Psychology and Psychiatry, 38(5): 581-586, 1997.

10) 橋本好市：障害者への偏見変容のために必要な接触体験における支点的の検証，社会福祉士会，9，79-86，2002.

11) 上野耕平：体育・スポーツ活動への参加を通じたライフスキルの獲得に関する研究の現状と今後の課題，スポーツ心理学研究，38(5)：581-586，1997.